五木寛之

さらばモスクワ愚連隊

ДО СВИДАНИЯ, МОСКОВСКИЕ СТИЛЯГИ

GIブルース
白夜のオルフェ
霧のカレリア
艶歌

さらば モスクワ愚連隊

五木寛之

講談社

さらば モスクワ愚連隊

著　者　五木寛之

発行者　野間省一

定価はカバーに表示してあります。

第1刷発行　昭和42年1月30日
第28刷発行　昭和50年9月10日

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽 2-12-21
TEL　東京(945)1111〈大代表〉
振替　東京3930
郵便番号　112

印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。　(文2)

目次

さらば モスクワ愚連隊 7
GIブルース 59
白夜のオルフェ 101
霧のカレリア 147
艶歌 187
あとがき 240

装　幀　山内　暲

カバー写真　山口真治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さらば　モスクワ愚連隊

さらば　モスクワ愚連隊

1

ソ連民間航空（アエロフロート）のTU一一四は、雲海の上を粘り強く飛びつづけていた。ハバロフスク空港を発ってから、もう六時間はたっぷり飛んだだろう。

私にとっては、ついてない空の旅だった。厚い雲海にさえぎられて、シベリアは完全にその顔を隠していた。わずかに見えたのは、離陸直後に急上昇する翼をかすめて光ったウスリー江（こう）ぐらいのものだ。

乗客の半数は日本人だった。横浜からずっと一緒にやってきた連中である。緑色の軍帽をかぶったソ連の士官や、家族連れのロシア市民たち、それに馬鹿におとなしいアメリカ人の旅行者も数人いた。チェスを指しているのもいたし、酒を飲んでいるのもいた。百キロはありそうなロシア女は、爆音に負けない堂々たるいびきを周囲に響かせている。

「ニェート」

すらりと背の高い赤毛のスチュワデスがやってきて首をふった。「ノー・カメラ」

私の前の席で撮影機を窓の外に向けていた日本人乗客が、薄笑いを浮べながら8ミリをバッグに押しこんだ。スチュワデスは指先でバッグをつまみあげると、ひょいと横の席においた。彼女は私に、早口のロシア語で何か喋った。

「もういちど、ゆっくりどうぞ」

と私がお恥ずかしいロシア語で言う。英語なら商売がら、かなりこなせるのだが、ロシア語のほうはそうは行かない。白系の混血で伯母のやっているロシア料理店で働いていたオリガとは、三年も一緒に暮したのだが、ロシア語は大して上達しなかった。幼い頃住んでいたというハルビンの話を、オリガはよくロシア語でしてくれたものだったが。

ずっと昔、私がジャズ・ピアニストとしてようやく売れ始めた頃の話だ。

同じ注意を三度もさせないで欲しいとこの人たちに伝えてくれ、とスチュワデスは言った。この人たちは公式代表団員(デリガーツィア)でスチリャーガなんかじゃないんだから。

「スチリャーガというのは何だい？」

と、私はたずねた。彼女は呆れたように肩をすくめると、そのまま行ってしまった。

モスクワまで、あと二時間。窓の外は相変らず明るいままだ。私はシートを倒し、サングラスをかけて目をつぶる。機体を抜けてくる震動に身をまかせながら、今度のモスクワ行きのことを考えた。

妙な仕事に首を突っ込んだものだ、と私は思う。何しろソ連人民相手にジャズの興行を打とうというんだからな。おかしな話だ。

今度のソビエト訪問のお膳立てをととのえたのは、大学時代の友人である日ソ芸術協会の森島だっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。私と同じように、彼も授業料が払えず抹籍処分をくらった組である。学校を追い出されると、やがてアルバイトがそのまま本職になってしまった。私はバンドにもぐり込んで本気でジャズをやりだしたし、彼は労働組合の専従とやらに就職した。たぶん、朝鮮の戦争が終った翌年ぐらいのことだったように思う。

それから五年ほどたって再会した。彼は組合問題について本を出版していたし、私は自分のバンドを持って仕事と人気に追われていた。しかし、実際にはお互に行き詰り、迷っていた時期だったようだ。

しばらくして彼は葉書をよこして、組合運動をやめて株屋になったと知らせてきた。私はその返事に、ピアノを捨てて芸能ブローカーに転向するつもりだと書いてやったのだ。

それから間もなく私はステージを降りた。あらたに始めた仕事は奇妙にうまく行った。三年目には事務所も構え、やがて国際プロモーションを設立して代表におさまった。

興行関係の仕事で、私が人々を驚かせるような成功をおさめたのは、決して仕事に対する熱意や努力のたまものではない。むしろそれと反対のもののためではなかったろうか。ピアノを捨て、ステージを降りたことは、私にとって人生を降りてしまったことと同じだった。当時の私は、すでに失うものを何ひとつ持ってなかったと言っていい。怖さを知らぬ投げやりの強気が、私をここまで押しあげたのである。同業者たちが二の足をふむ危険な企画を、私は冷えた心で片っぱしから手がけ、そして当てたのだ。

平均年齢六十四歳という絶望的な黒人バンドをニューオルリーンズから呼んだ時など、業界では嘲笑よりむしろ同情の声が聞かれたほどである。だが、私はそれに賭けた。そして、わずかな赤字こそ

出したものの、予定通り一ヵ月の全国巡演を打ちあげたのだった。
その頃の私は、無意識のうちに破滅を求めていたのではないかと思う。そして興行という仕事に、それを賭けたのではなかったろうか。
森島があの葉書をよこしてのち、再び私の前に現れたのは、つい数ヵ月前のことである。
お互に三十代にようやく踏みこんだばかりだった。そのくせ二人とも、すでに高価なダブルの背広がすっかり身についた感じの男になっていた。彼の名刺には、日ソ芸術協会理事という肩書きまであった。
「お前のことはよく聞いてるよ。呼び屋としちゃ一流だそうじゃないか」
と森島は私の名刺をひねくり回しながら言った。「そこで少し頼みがあるんだ。まあ、どこか静かな場所でゆっくり話そう」
彼は私を四谷の古い名の通った家へ連れて行った。そして、そこで森島はいささか毛色の変った話をもち出したのである。
ソビエトで日本のジャズ・バンドを呼びたがっているんだが、と彼は切りだした。
日ソ芸術協会は昨年設立以来、日本のアーチストをソ連に紹介する仕事をつづけてきた。古典芸能や民族舞踊、また合唱団などの公演も手がけてソ連各地で非常な好評を博している。だが今度の、ジャズを送れという注文には正直言って頭を抱えているところだ。何しろ全く畠ちがいの代物だけに見当がつかない。
そこで、と森島は私を挑むような微笑で見つめながら言った。「窓口は俺の協会扱いということで、どうかね」

「実質的なプロモートを頼む、というわけか」
私はぼんやりと庭を眺めながら言った。
「いま即答はできんな」
わかってる、と森島はうなずいて、
「まずこっちの内容や銀行を調べたうえで改めてお話を伺いましょう、ということだろ。ま、いいだろう。それがビジネスの常識ってもんだからな」
この野郎、と私は思った。見えすいた挑発だ。私はそしらぬ顔で、Nプロ やAセンターには話は持ちこまなかったのか、ときいた。
「実を言うと、両方とも断わられた。それでお前のところへ持ちこんだんだ」
「そうか。よし」
乗ってやろう、と私は決めた。不動産業や学校経営にまで手をひろげ始めているNプロやAセンターに対する反発も、多少はあったに違いない。その晩、森島と私は少し酒を飲み、競馬の話などをして、別れた。
翌日、事務所で業務に関する簡単な覚え書きを取り交した。森島が帰った後で、私は日ソ芸術協会の信用調査を電話で依頼した。
調査書は三日後に届いた。銀行筋は予想通り、余りかんばしいものではなかった。だが意外だったのは、会長をはじめ役員の主だったポストに旧財閥系商社のお偉方が数人顔を連ねていたことである。私は反対の側のスポンサーを考えていたのだが。いずれにせよ、私にとってはどうでもいい事だった。誰の懐から出ようと金に変りはないのだ。

その後、仕事はかなり順調に進んでいた。送り出すメンバーの編成も、思ったより楽にまとまりそうだった。どうやら不況の波は、まともなジャズをやっている連中のほうに厳しく押し寄せてきているようだった。トップ・クラスのプレイヤーが自分で売り込みに来たりもした。ビッグ・バンドはテレビ番組の伴奏で何とか食いつないでいたが、好きな音楽だけを演奏する小さなグループは、かなり無理なエキストラにも顔を出しているらしかった。

五月の末に急に森島から、現地へ行ってみてくれ、と言ってきた。公演は九月だったが六月中にモスクワで打ち合わせをやって欲しいという話だった。私はレパートリイの決定や構成の面で迷っている所だった。ロシアの大衆がいったいどんなジャズを聞きたがっているのか、それが知りたいと思っていた。

私は夏休みをかねて、モスクワへ行くことに決めた。当の相手であるソ連対外文化交流委員会と、日本大使館の担当者との意見調整を終れば、十日余りの休暇が楽しめる。帰りはストックホルムへ出て、SAS で東京へ直行すればいい。山積みしたスケジュールを強引に整理してしまうと、私は六月十日横浜発のソ連船舶公団船バイカル号で、ナホトカへ向け出発したのである。ナホトカからハバロフスクへ鉄道で、そこからTU一一四で一気にシベリアを越えるというコースに私は引かれたのだった。

ロシア語のアナウンス、つづいて訛りの強い英語のアナウンスが響いた。間もなくモスクワ上空へ到着。禁煙の赤ランプがつく。

私は体を起こして窓の外を眺めた。巨大なエンジンを抱えた主翼の先が、不意に激しくしなうのが

見える。八個の逆回転するダブル・ターボ・エンジンは、快調なテンポで迫力のあるジャム・セッションをやっていた。他の乗客たちにとっては、それは只の騒音に過ぎまい。だが、その轟音が時おり微妙に音階を変え、転調するのが私にはわかる。

機体を抜けてくるその爆音に耳を傾けているうちに、なぜか重苦しい不安が心の隅で魚の尾びれのように動いたのを、私は感じた。いやだな、と私は思った。それは覚えのある不吉な予感だった。こんなふうになると、ろくなことはない。

不意に機体がゆれた。激しくしなう翼の先に、厚い陰惨な雲の壁が迫って見えた。TU一一四は、その暗い壁に正面から突っこんで行こうとしていた。その時、さっきの予感が的中した。深い所に閉じこめておいたはずのピアノの音が、噴水のように目の前にふきあげてきた。

それは突然、何かの拍子に引きおこされる激しい憂鬱状態のイントロだった。私がステージを降りてから、年に一度か二度、こいつがやってくる。私にはその病気の原因も治療法も判っていた。必要なのは音だった。

靴先で軽く床をたたく出の合図。さり気ない導入部の数小節。滑りこんでくるクラリネットとトランペットの同調の合奏。そして、思わず声をかけずにはいられない感動的な独奏の受け渡し。心臓の鼓動をおもわせるベースの底深い唸りと、旋律の流れを鋼鉄のタガのように締めあげるドラムのリズム。しだいに熱く、さらに激しくふくれあがる血管。それが今にも破れようとする瞬間、一斉に吹きあげる最後の合奏。ため息のような終結部のあと、一瞬の間をおいてあふれだす客席の興奮。したたる汗と仲間同志の目くばせ。微笑と、爽やかな疲労。

だが、それは私が再び帰って行くことのできない過去の世界だった。私が一言、入れてくれ、と言

えば昔の仲間は喜んで弾かせてくれるだろう。だが、私にはそれはできなかった。私はジャズを愛し過ぎているのだった。かつて私が創りだした、あの本当のブルースの音を、私の指はもう弾くことができない。私に本当のジャズを弾かせた何かが、私の中から失われてしまっているのだった。五年前のあの夏のおわりに、何かがこわれ、気がついた時にはすっかり錆びついていたのだ。それに気づいた時、私は人生を降りた気でステージを降りたのだった。

録音の終ったスタジオで、私がピアノを止めてマネイジメントをやると宣言した時、メンバーは皆、黙って楽器をいじっているだけだった。連中は私と同じようにジャズを愛していた。私の決心の背後にあるものを、彼ら全部が感じ取っていたのだろう。私は仲間が口先だけの止めだてをしない事が嬉しかった。正直に言って誰か一言ぐらい何か言うのではないか、と思ってはいた。それだけに辛い嬉しさだったと言いなおすべきだろう。

私は当時注目され始めていた新人を後釜にすえる事を皆にすすめたが、それだけは誰にも受け入れられなかった。彼らは当時、かなり売りこんでいたブルー・デュークスを解散し、散り散りに他のバンドへ移って行ったのだ。連中は私の退職金がわりに、彼らとファンの全てが愛していたバンドの名前を私に贈ったのだった。ブルー・デュークス。一文にもならない代物だったが、私にとっては何物にもかえ難い記念品である。

その夏の最後のステージを終えたあと、私たちは人気のない客席に降りて、清酒とスルメで一杯やり、聴き手のいない演奏を一曲やって別れた。ニグロの弔いの行進を真似て、ブルースをやりながら一人ずつ消えて行った。私はピアノのふたをしめ、管理人に挨拶して最後に建物を出たのだった。

機体が傾いた。エンジンの音が急に力を失った。短い衝撃と数回のバウンド。どこかでコップの割

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com